

## 地中海古代都市の研究 (130)

## メッセネにおける劇場調査報告 2009 (3) スケーネの部材

正会員 ○岩田千穂\*1 同 伊藤重剛\*2 同 吉武隆一\*3  
同 安井伸顕\*4 準会員 セイン・ソクンティ\*5

9. 建築歴史・意匠—4. 西洋建築史  
ギリシア メッセネ 劇場 スケーネ

## 1. はじめに

前稿でスケエネの遺構を取り上げ、現状と考察を述べた。本稿では前稿に引き続き、これまでに実測調査をおこなったスケエネ部材の報告をおこなう。また、その成果をもとにスケエネ遺構について考察をおこなう。

## 2. スケーネの部材

メッセネのスケエネ部材は多くが失われており、発掘調査により出土した部材の数は多くない。現在、スケエネ遺構より出土した部材は取り上げられ、別所に保管されている。われわれはこれら出土部材の実測調査をおこない、詳細な実測図面を作成した。部材の計測は全くの手測りでおこない、曲尺、鋼尺、コンベックスなどを使用した。これまでの調査で、合計95個の実測をおこなった。以下、部材の種類ごとに概要を述べる。

## 2-1. 柱 (礎盤、柱身、柱頭)

## 2-1-1. 礎盤 (表1、図1)

これまでに、合計17個の部材を実測した。大きさは大小さまざまで、全て大理石造である。スケエネに使用されたと思われる柱礎の一部は劇場以外の遺構でも発見されており、他の建物に再利用されたものもあるようだ。モールディングは、トルス、スコティア、トルスの順に施されており、いわゆるアッティカ式である。下段にプリンスがあり、矩形のプリンスが付くものと円形のプリンスが付くものがある。ダボについては、上面底面双方に1つずつあるもの、底面に複数あるもの、上面にも底面にもないもの、あるいは上面のみにあるものと、さまざまである。礎盤の高さにより、4つに分類することができる。ただし、No.53は極めて巨大なため明確に他と分けることができるが、他の礎盤に関しては、明確な線引きが困難であった。そこで、全体高さの差がひときわ大きかったところで分け、4分類した。

プリンスの形状については、矩形と円形という違いがあるが、全体の高さには大きな差異はなかった。プリンスの形状に違いがみられるのは、他の建物部材を再利用したものであるためであると考えられる。

## 2-1-2. 柱身 (表2、図2)

柱身は、ギリシア時代の柱のように複数のドラムで構成されるのではなく、全体が一つの石材で造られている。柱身で完存しているものはなく、割れていくつかの破片の状態出土した。また、一部の柱身破片に人為的に割ろうとして掘られた溝がみられるので、明らかに意図的に破壊されたことがわかる。接合可能な破片はメッセネ考古学協会により接合され、ほぼ完全な姿の柱身が復元された。

これまでに実測した柱身は9本である。完全な姿に復元されているものの中で最も高い柱身は4.608m、最も低い柱身は2.329mであり、両者の間にはかなり高低差がある。完形がわかる柱身は、高さにより4つに分類することができる。

また、柱身の石材には様々な材質のものが使用されており、灰色花崗岩、赤斑大理石、赤白の縞模様の大大理石、薄緑の縞模様の大大理石、灰色大理石、砂岩状の大大理石、そして白色の結晶室大理石と、7種の石材を見ることができる。

## 2-1-3. 柱頭 (表3、図3、図6)

これまでに実測をおこなった柱頭部材は18個であり、コリント式柱頭、イオニア式柱頭、ロータス・アーカサス式柱頭の3種類がある。

コリント式柱頭は劇場内で出土した柱頭部材の中で最も大きいものである。現在2個のコリント式柱頭が確認されているが、同種の柱頭部材破片が見つかり、実際は3~4個あったと考えられる。

イオニア式柱頭は装飾で見ると2種類出土している。ひとつは渦巻き装飾が部材に対して斜め45度飛び出すもので、もうひとつは二つの渦巻きが平行に並ぶ

表1 礎盤寸法・分類表

	礎盤高さ	モルディング高さ	上面直径	プリンス高さ	プリンス幅
小さな礎盤平均値	0.26	0.16	0.450	0.11	0.64
中くらいの礎盤平均値	0.31	0.18	0.440	0.12	0.58
大きな礎盤平均値	0.36	0.22	0.530	0.14	0.7
特大の礎盤平均値	0.46	0.15	0.730	0.3	0.93

表2 柱身の寸法・分類表

	高さ	上部直径	下部直径	上面直径	底面直径
大きな柱身の平均値	4.060	0.450	0.510	0.520	0.570
中くらいの柱身の平均値	3.520	0.380	0.430	0.440	0.490
中くらいの柱身の平均値	2.910	0.350	0.380	0.380	0.410
小さい柱身の平均値	2.330	0.290	0.340	0.300	0.370

表3 柱頭寸法・分類表

	柱頭高さ	アバクス高さ	底面直径
コリント式柱頭平均値	0.570	0.100	0.400
イオニア式柱頭平均値	0.15	0.45	0.37
小さなロータス・アーカンス柱頭の平均値	0.410	0.100	0.330
大きなロータス・アーカンス柱頭の平均値	0.480	0.090	0.400

表4 アーキトレーブ・フリーズ寸法・分類表

	高さ	アーキトレーブ高さ	フリーズ高さ	上面幅	下面幅
大きな装飾あり部材平均値	0.62	0.37	0.25		
大きな装飾なし部材平均値	0.58	0.36	0.22	0.55	0.37
小さな部材平均値	0.29	0.18	0.11	0.39	0.36

表5 ゲイソン寸法・分類表

	浮彫装飾	ゲイソン高さ	奥行き	正面高さ
装飾ありゲイソンの平均値	○	0.34	0.86	0.3
装飾なしゲイソンの平均値	×	0.27	0.73	0.25

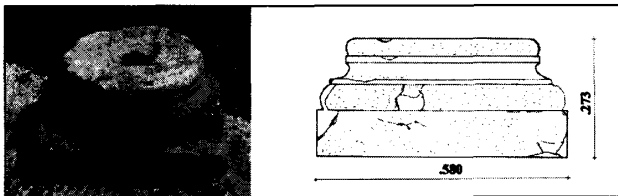


図1 小さい礎盤 (No.108)

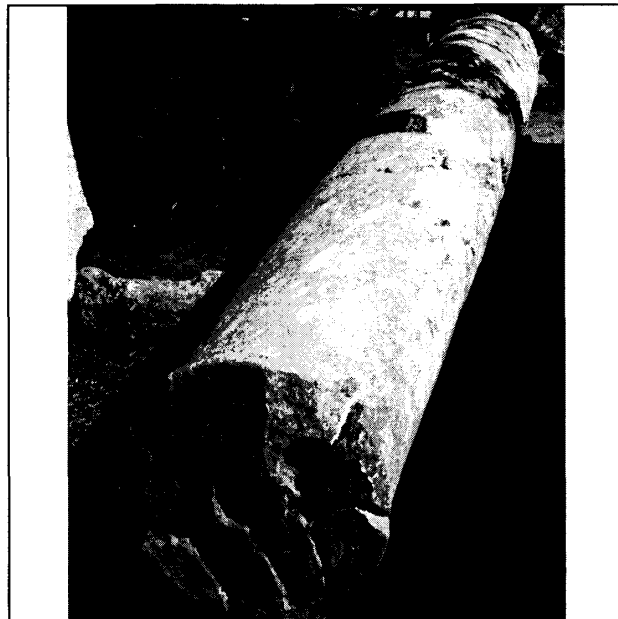


図2 柱身

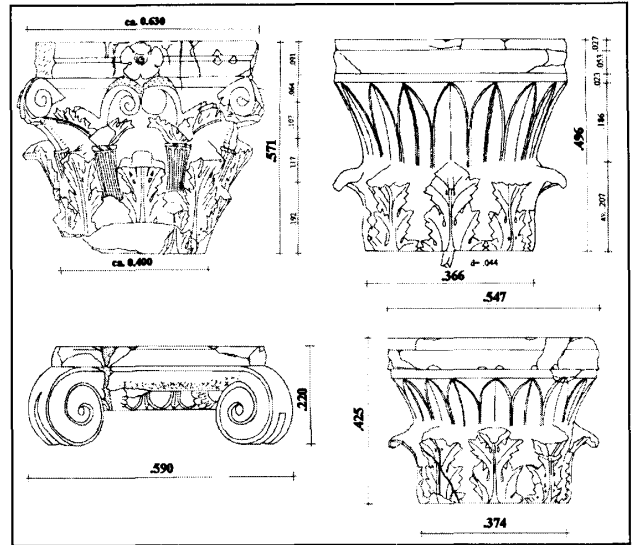


図3 柱頭

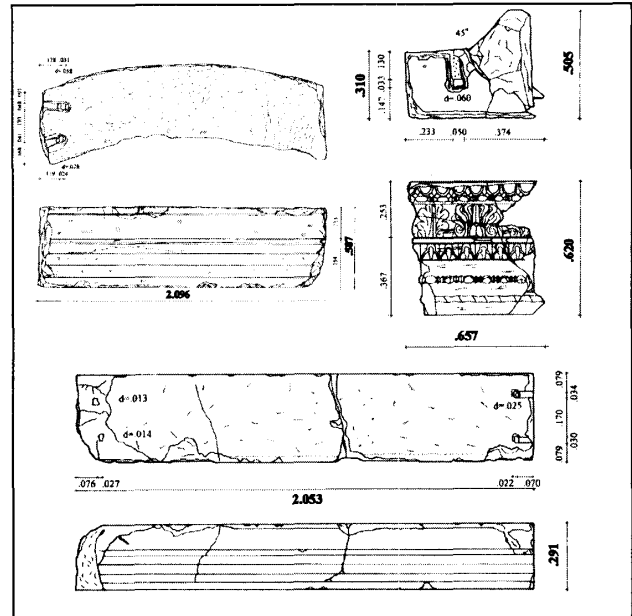


図4 アーキトレーブ・フリーズ

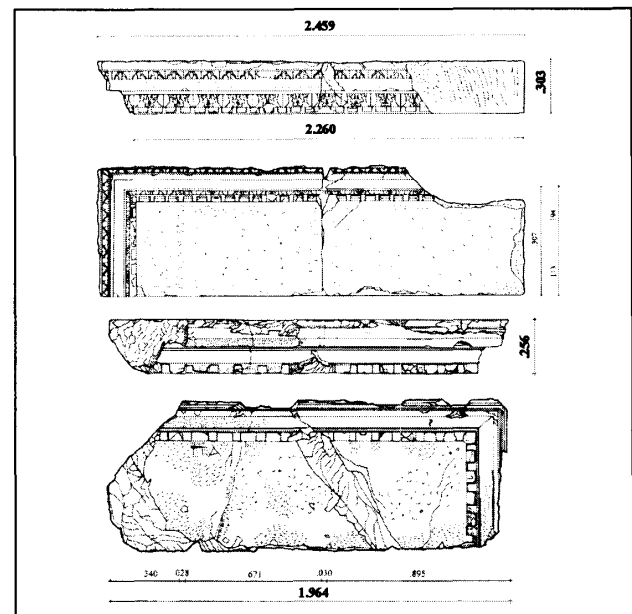


図5 ゲイソン



図6 柱頭(右: No.808, 左:No.14)

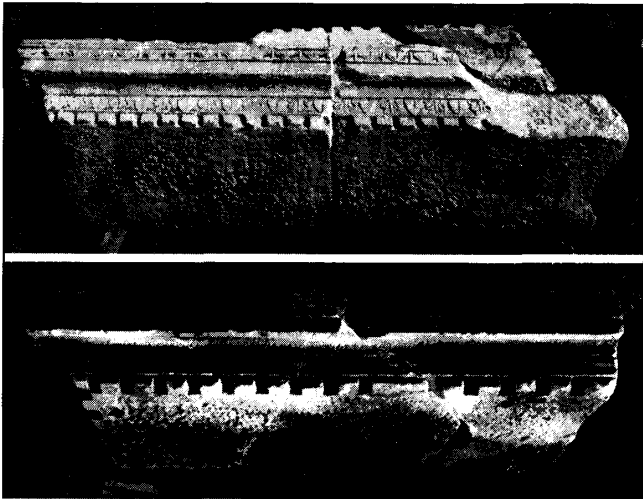


図7 ゲイソン(上:No.2, 下:No.33)

ものである。両者を比較すると渦巻きの付き方が異なるが、部材の高さや上面、底面幅に関しては大きな差が見られない。全体的に寸法のばらつきはわずかであるので、すべて同じ階層に据えられたと考えられる。

ロータス・アーカンスス式柱頭は、ベル型のカラトスにロータスの葉とアーカンススの葉が1段ずつ付く。これまでに実測した10個の部材は、部材の高さから2つに分類することができる。

## 2-2. アーキトレーブ・フリーズ (表4、図4)

アーキトレーブとフリーズとは、別々の部材でなく1つの部材として造られている。これまでに7個の部材を実測した。アーキトレーブ・フリーズを単純に高さで分類すると、0.6m程度のものと0.3m程度のものとに分けることができる。ただし、0.6m程度の部材の中には部材正面の装飾があるものとないものがある。

## 2-3. ゲイソン (表5、図5、図7)

軒部材であるゲイソンは、これまでに23個の実測をおこなった。石材の材質は全て白大理石であるが、結晶化の度合いが低いため肌理が粗く一見石灰岩のように見える。加工精度に関しては、部材ごとにかなりばらつきがあり全体的にあまり精巧ではない。また、部材の高さは一定しておらず、上面が水平でないものが

多い。このような上面の勾配は水勾配であるとも考えられるが、勾配の付き方がばらばらであるので、他の建物の部材を再加工してゲイソンを制作したためか、単なる施工誤差とも考えられる。

ゲイソンの特徴は、部材正面の意匠である。メッセネ劇場スケーネに使用されたゲイソンは、正面の装飾から明確に二分することができる。両者ともに部材正面にモルディングが施されているが、一方は心鏤装飾と舌葉装飾との浮彫装飾が施されており、もう一方は施されていない。浮彫装飾付きの部材は浮彫装飾なしの部材と比べ部材高さが高く、両者は異なる階層に据えられた可能性が高い。

## 2-4. シーマ

シーマはゲイソンの上部に据えられる軒瓦である。これまでに実測した4つの部材は全体的に高さが揃っている。部材正面のモルディングは、下段に大きなシーマ・レヴェルサが施され、上部にカラスのくちばし状の装飾がある。また、シーマNo.T30の上面に半円形断面の切り込みが施されており、これは雨どいであると考えられる。

## 2-5. 破風

これまでに実測した4個の部材は小さな破片の状態であるが、正面に三角形の破風が観察される。この破風の勾配はおよそ1/6である。

## 2-6. その他の部材

### 2-6-1. 付け柱礎盤

付け柱の礎盤はこれまでに2個実測をおこなった。スカエナエ・フロンスのニッチとポストスケニオンをつなぐ出入り口両脇に付け柱を据えた痕跡が見えることから、いずれもこの位置に据えられたと考えられる。幅0.7~0.8m程度、高さは0.28~0.44mで高さに相違がみられる。モルディングは円柱の礎盤と同様であるが、片方はトルスが弧を描かず角のない四角形のようにになっている。

### 2-6-2. 付け柱の柱頭

付け柱の柱頭は、これまでに3つ実測した。装飾は中央に花と葉、その左右に葉が付けられており、花のデザインは2通りある。上面は幅0.7~0.8m、高さ0.4~0.6mで一定でない。3つのうち1つは他の2つよりも全体的に大きい。

これら付け柱は、当該スケーネにおいて構造的な役

割は持たず、装飾としての部材であったと思われる。

### 2-6-3. 立枠部材

スケーネの出入り口の立枠部材と思われる石材を3個実測した。いずれも割れており、完形のものはない。正面と両側面の3面のみ上仕上げで、上端部に剝形が残っているものもある。

### 3. 考察

前節で紹介した部材の情報をもとに、スケーネの復元を念頭に置き考察する。

#### 3-1. 部材の分類方法

本年度までに実測をおこなった部材は計95個である。今回は部材の分類作業を試みたが、当該遺構の部材は、細かい装飾の違いに依り明確に分類することができない。それは、スケーネ建物を造る際に他の建物や前代のスケーネ部材を再利用、再加工したためであると考えられる。そこで今回は、大まかなオーダーの違いや寸法の違いに依り分類をおこなった。

#### 5-2. 階層の検討

以上の方法で部材の分類をおこなったところ、以下のことを指摘することができる。

- ①柱身は、高さにより4種類に分類される。
- ②コリント式、イオニア式が1種ずつ、ロータス・アーカンサス式柱頭が2種の計4種の柱頭が存在する。
- ③ゲイソンが装飾の有無により2種類に分類される。
- ④アーキトレーブ・フリーズ部材が高さにより2種に分類される。

スカエナエ・フロンスにはニッチがあるので、同じ階層に高さが異なる2種類の柱があった可能性が高い。2種類の柱とはすなわち、ニッチに据えられる柱と、スケーネの躯体上に据えられる柱である。①において柱が4種類に分類され、また、②～④で取り上げた部材が2～4種類に分類できるので、スカエナエ・フロンスは2層であった可能性が高い。また、ローマ時代のスケーネは通常、客席の最後部とほぼ同じ高さであることが多い。スケーネのニッチ床から座席を支える後壁の最高部までの高さは約12mである。したがって、メッセネ劇場のスケーネは全体の高さ約11～12mの2層構成であったと考えられる。

\*1 熊本大学大学院自然科学研究科教授 工博  
 \*2 熊本大学大学院自然科学研究科 博士前期課程1年  
 \*3 熊本大学大学院先端機構 特任助教 工博  
 \*4 熊本大学大学院自然科学研究科 博士後期課程2年  
 \*5 熊本大学工学部建築学科 4年

#### 5-3. 平面における部材配置の検討

各部材が平面上でどの部分に配置されたかというのは、現在の資料量から断定することがやや困難である。現在までで、部材配置について考えられることは以下の3点である。

- ①一般的なスカエナエ・フロンスのオーダーを参照すると、寸法が大きな部材が第1層へ、小さな部材が第2層へ据えられたと考えるのが自然である。ゲイソンについては、浮彫装飾が施されている部材が、そうでない部材に比べ全体的に大きいので、これらが第1層へ配置されたと考えられる。
- ②部材の形状が位置を決める手がかりとなる。ゲイソン部材の中に円弧がついているものや、正面と側面とに装飾が施されているゲイソン部材が存在し、前者は円形ニッチに、後者は建物の隅部分に使用されたと判断することができる。
- ③形状と同様に重要な要素が、部材の材質である。たとえば、大きな柱身の材質が他の柱身と違い色彩豊かなものであることから、これらは重要で目立つ位置、すなわちスカエナエ・フロンスのニッチ部分に据えられたと考えられる。

このように、いくつかの部材がその特徴により平面上での位置を判断することができる。

### 6. おわりに

多くの部材に関しては、未だはっきりと位置を断定することができない。今後、柱の組み合わせや他の劇場遺跡におけるスケーネの事例から、スケーネ全体の姿を検討する必要がある。

謝辞 この研究は、学術振興会科学研究費基盤(S)課題番号20226012によりおこなわれた。

#### 参考文献

- W.B.Dinsmoor, *the Architecture of Ancient Greece*, New York, 1950  
 Margarete Bieber, *the History of the Greek and Roman Theater*, Princeton, 1961  
 J. J. Coulton, *Ancient architects at work*, 1977  
 Vitruvius, *Ten Books on Architecture*  
 熊本大学環地中海遺跡調査団『地中海建築』1979  
 伊藤重剛訳『古代ギリシアの建築家』中央公論美術出版、1993  
 Frank Sear, *Roman Theatres -An Architectural Study-*, Oxford, 2006

Prof., Dr. Eng. Kumamoto University  
 Postgraduate Student, Kumamoto University  
 Assistant Prof., Dr. Eng., Kumamoto University  
 Postgraduate Student, Kumamoto University  
 Undergraduate Student, Kumamoto University